

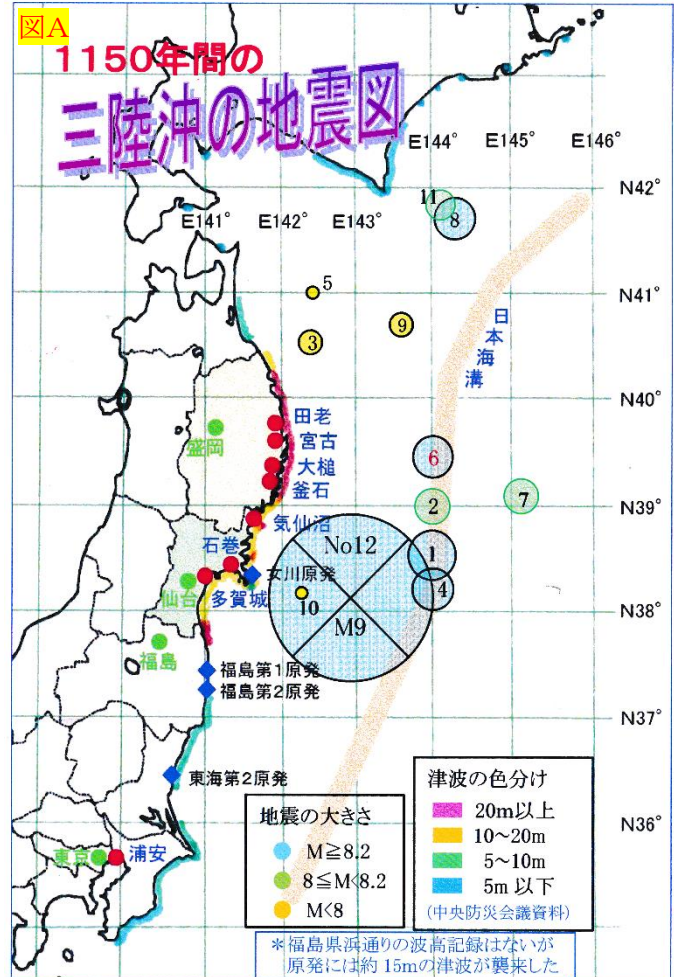
濁水かわら版

第79号 2019年3月10日
ボケ防止を兼ねて 中安 宏規

東日本大震災 3・11 から 8 年 忘れるな 3・3 や 6・15 上

今回と次回 80 号は震災直後から2013年にかけてまとめた記事を基に書いたことをご了承下さい。

- 2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災(東北地方太平洋沖地震=M9)から8年が過ぎ去った。その震災発生3週間後の4月1日から8月末にかけ三陸沿岸の7地域(図A赤●印)を日帰り歩いた。自然の脅威に畏怖し、関連史料を読み始めると、先人が書き残した最古の地震の記録は1600年前に遡る。その中から三陸沿岸を襲った被害地震12件を選び、点描してみた。
- 図Bは図Aに震源地を記した12の巨大海底地震の基本データである。三陸沿岸の津波対策は明治29年の明治三陸沖地震(表・地図 No6)に端を発し、その37年後の昭和十勝沖地震(No7)の大津波を機に本格化する。対策の大半は明治三陸大津波の波高を基にしており、その地震を基準(1)とし円の大きさで地震力=エネルギーを比較すると、東日本大震災は16倍もの破壊力だった。
- 福島県は、第1原発の事故で現地に入ることが出来なかった。今回は、当時の覚書を基にした。
- 不思議なことに旧暦を含め9件が6月までに発生、7月以降は3件である。最も多いのは3月。3/3日(No7)、3/4日(No8)、3/11日(No12)、3/12日(No3)。暦の上では地中の虫が這い出る啓蟄前後。もしかしてナマズや乙姫様のストレス暴発か!?



図B	西暦	和暦	地震・震災名	北緯	東経	M	津波規模	地震比	被害
1	869	貞観 11/5/26	貞観の三陸沖地震	38.5	144.0	8.3	4	1.41	溺死 ≒ 1000
2	1611	慶長 16/10/28	慶長の三陸沖地震	39.0	144.0	8.1	4	0.71	人馬死 3000 余
3	1677	延宝 5/3/12	延宝の三陸沖地震	40.5	142.3	7.9	2	0.35	盛岡八戸家倒壊
4	1793	寛政 5/1/7	寛政の宮城沖地震	38.3	144.0	8.2	2	1.00	死者 44 以上
5	1856	安政 3/7/23	安政の八戸沖地震	41.0	142.3	7.5	2	0.09	死者 29
6	1896	明治 29/6/15	明治の三陸沖地震	39.5	144.0	8.2	4	1.00	死者 21959 人
7	1933	昭和 8/3/3	昭和の三陸沖地震	39.1	145.1	8.1	3	0.71	死不明 3064 人
8	1952	昭和 27/3/4	昭和 27 年十勝沖地震	41.7	144.2	8.2	2	1.00	死不明 33
9	1968	昭和 43/5/16	昭和 43 年十勝沖地震	40.7	143.6	7.9	2	0.35	死者 52 人
10	1978	昭和 53/6/12	宮城県沖地震	38.2	142.2	7.4	-1	0.06	死者 28
11	2003	平成 15/9/26	平成の十勝沖地震	41.8	144.1	8.0	2	0.50	死不明 2
12	2011	平成 23/3/11	東日本大震災	38.1	142.9	9.0	4	15.85	死不明 18431

①データは地震比を除き理科年表 2012 年版による。地震比は独自に計算した。②津波規模は6段階で最高が4 ▼4=波高30m以上、500km以上の海岸線に顕著な被害 ▼3=波高10~20m、400km以上の海岸線に顕著な被害 ▼2=波高4~6m、若干の内陸までの被害や人的損失 ▼1=波高2m前後、海岸及び船の被害 ▼0=波高1m程度 非常に僅かの被害 ▼-1=50cm以下、無被害 (2012 年版理科年表)

1933(昭和8)年 岩手は冷害と満州事変で疲弊していた



図Cは昭和震災後の田老村。(岩手県昭和震災誌より) 図Dは2011年4月1日の宮古市田老。堤防高は10m。粉塵で霞んでいた。(筆者撮影)

⑤ 1933年3月3日午前2時31分頃、岩手県沖へ250kmの海底で推定 M8.1 の地震が発生。陸上では普通の揺れだったが 30 分後、大津波が岩手・宮

城・青森・北海道沿岸を襲った。下の図Eは、開会中の4日午後の衆院本会議に報告された4道県の被害速報である。岩手県の被害が大きかった。

図E 3月4日午前零時現在の東北・北海道の被災状況(衆院本会議で内務大臣・山本達雄報告:議事録より作成)

	人的被害(人)				住宅被害(戸)					船舶(隻)	
	死者	不明	負傷	計	倒壊	流出	焼失	浸水	計	流失等	
岩手	1,380	696	276	2352	971	2,453	211	5,044	8,679	調査中	
宮城	136	227	25	388	283	440	—	1,229	1,952	1,096	
青森	8	21	37	66	13	59	—	調査中	72	370	
北海道	11	4	0	15	12	11	—	70	93	14	
計	1,535	948	338	2821	1,279	2,963	211	6,343	10,796	1,480	

図F以下)★田老村(たろう村:現 宮古市) ★唐丹村(とうに村:現 釜石市) ★綾里村(りょうり村:現 大船渡市)

図F 県紙「岩手日報」ルポ「大海嘯見聞記」掲載の被害(田老村は3/21日・唐丹村は3/16日紙面)

	戸数	流失	流失割合	死者	不明	死者不明計	
田老村	561	510	90.9%	490	440	930→	一家全員死亡 66戸
うち田老部落	362	357	98.6%	415	398	813→	対村内 87.4%
唐丹村	519	254	48.9%	115	245	360	
うち本郷部落	98	92	93.9%	100	227	327	同上 90.8%

図G 岩手県の被災 36 町村と被災ワースト 3 村の最終被害(岩手県昭和震災誌より)

	人口(人)	死者	不明	死者不明計	死者不明割合	負傷	被災者	罹災者計	罹災割合
36 町村	133,246	1,408	1,263	2,671	2.0%	805	33,502	36,978	27.8%
田老村	4,945	520	452	972	19.7%	170	1,888	3,030	61.3%
唐丹村	3,694	135	224	359	9.7%	34	1,153	1,546	41.9%
綾里村	2,772	95	86	181	6.5%	18	1,331	1,530	55.2%

不安定な政治状況下の昭和震災

⑥ 大正天皇の崩御が 1926(大正 15)年 12 月 25 日。昭和元年は 1 週間で終わり、昭和 2 年へ。震災まで実質 6 年 2 か月の間に総理大臣は若槻礼次郎、田中義一、浜口雄幸、若槻礼次郎(第2次)、犬養毅、斎藤実と延べ6人を数え、平均1年余で交代している。国会は 1928 年の“初の普通選挙”で政友

会と民政党の 2 大政党に収斂した。だが、テロと軍のクーデター計画、戦争も起きた。30 年、民政党浜口雄幸首相が東京駅で狙撃され、翌 31 年は 3 月と 10 月に軍部のクーデター計画が発覚。31/9 月に満州事変が勃発。32 年は満州国建国、海軍将校らの 5・15 事件で犬養毅首相が射殺された。33 年/2 月には国際連盟が、日本軍の満州撤退 →次頁へ

お金の行く先は西南地方 東北の民は戦場で御奉公

勧告案を42対1で可決、同3/27日に日本は連盟を脱退した。その最中の3/3日、津波が三陸を襲った。

早業とぶった切りと借金

⑦ 犬養首相が凶弾に斃れたあとを受けた齋藤首相は、海相を務めたこともある軍人。政党・軍部・官僚の三者三様が支える挙国一致内閣は、不安定な政権だった。だが、危機意識を抱いた与野党が政府に圧力をかけ、630万9734円の復旧予算案を3週間後の議会最終日(3/24日)に可決した。早業だが、大蔵省は原案1100万余円を値切った。東京日日新聞(毎日新聞)が「三陸地方出身の満州派遣軍兵士は約420名」と伝え、齋藤首相が岩手県水沢出身であったこともあり、早業と復旧費ぶった切りが妥協したのだ。

⑧ 賛成討論を行った与野党は「これでは復旧は無理だが、全額借金での工面には感謝する」と述べた。野党民政党の工藤鐵男は政府を質した。

「歴代政府の金の行く先は西南地方(西日本)に多く、東北地方の勇敢な壮丁(ここでは兵役に就く若者)は、厳寒の天候と闘って第一線(満州の戦場)に御奉公する以外に経済的に恵まれていない」

蔵相の高橋是清は「防潮堤建設など時局匡救費(救済費)を三陸地方に多く回したい」と答えた。

2人の物理学者

深く愧じた田中館愛橘

⑩ 物理学者の田中館愛橘(1856-1952)は、震災5日後の3/8日、貴族院本会議で政府への質問を行った。彼は冒頭、次のように述べている。

「文武朝野の諸君が救済に力を傾けられ…うれし涙を催す次第です。ただ私は専門学徒の1人として斯様な自然現象を予報し得ないことを悲しみ、かつ深く之を愧じる者であります」

恥じるが「きまり悪い」に対し、愧じるは「己にはじる」で、恥ずかしさの中身が格段に違う。東日本大震災で専門家がそろって「想定外」を連発したのは、愧じではなく言い訳の恥のように思われた。

彼は先進的な物理学者であった。陸奥国福岡村(岩手県二戸市)生まれ。ローマ字運動で日本式ローマ字を発案。東京大学理学部時代、米教師メンデンホールと共に東京と富士山頂の重力測定を行った。英グラスゴー大と独ベルリン大に留学し1891年帰国。同年10/28日の濃尾地震を調査し根尾谷断層を発見。翌92年に設立された政府の震災予防調査会委員に就任。全国の地磁気測量を行う。

1916年10月、東大教授在職25年、満60歳を迎え辞表を提出。翌年4月依願免官となる。余談に

宮澤賢治「春と修羅」

⑨ 花巻の詩人宮沢賢治は、明治震災の1896(明治29)年に生を受け、昭和震災の1933(昭和8)年に37歳で旅立った。「春と修羅」第3集の詩稿補遺に冷害を次のように詠んでいる。(冒頭部分)

倒れかかった稲のあひだで

ある眼は白く忿つてみたし

ある眼はさびしく視線をさけた

…そして結局たづねる先は

地べたについたそのまつ黒な雲のなか…

なるが、彼の辞表は日本の定年制度の基になり、その後、官公署や企業に広まり今日至った。

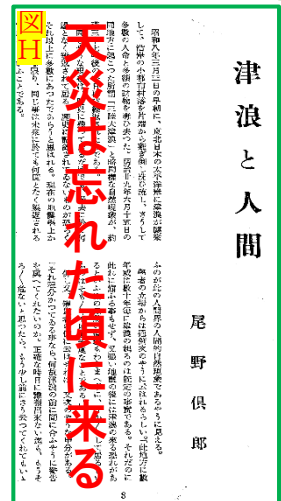
25年貴族院議員、44年文化勲章受章。昭和震災当時69歳で地球物理学の大御所であった。

田中館は本会議で(1頁図Bの1~3、6)の歴史地震を取り上げ「少なくとも学校や病院、役場は津波の及ばぬ高台に建てるべき」と、提言した。その意見を斟酌したのか、内務省偏「三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告」(1934年刊)によると、宮城・岩手両県の計33市町村・98部落が3000戸の住宅の高地移転を行った。内閣府によると、このうち今震災で浸水被害を免れたのは、宮城県1集落29戸、岩手県8集落268戸であった。

「津浪と人間」を記した寺田寅彦

⑪ 当時、田中館愛橘と並ぶ物理学者に寺田寅彦(1878-1935)がいた。熊本の旧制5高時代、夏目漱石に俳句を師事した彼は、洒脱な文筆家でもあった。寺田は震災発生と同時に「津浪と人間」と題するエッセーを雑誌「鉄塔」に寄稿、尾野俱郎のペンネームで5月号に掲載された。

(図H)書き出しは「昭和八年三月三日の早朝に、東北日本の太平洋岸に津浪が襲来して、沿岸の小都市村落を片端から薙倒し洗ひ流し、さうして多数の人命と多額の財物を奪ひ去つた。明治二十九年六月十五日の同地方に起こつた所謂三陸大津波と略同様な自然現象が、約三十七年後の今日再び繰返されたのである」



★寺田寅彦の「津浪と人間」を含め、80号に明治震災の政府の無対応と今震災などに触れます。